

## お手紙（アーノルド・ローベル）

吉田 紘士、河南 希、紺谷 篤、

里見 凌佑、高宮 奈巳、波部 真亜子

### 一 作者と作品について

作者のアーノルド・ローベルは一九三三年アメリカ、ロサンゼルスに生まれる。幼少期は病気がちであったが、高校卒業後は「プラット・インステイテュート」（四年制の私立美術学校）に入学し、そこで本のイラストレーションを学ぶ。ポーランド生まれで絵本作家となる同窓生のアニタ・ローベルと出会い結婚し、二人の子どもをもうける。お互いに影響しあいながら絵本作りを進め、一九七三年「ふたりはいつしょ」でニューベリー賞、一九八一年「どうぶつものがたり」でコールドコット賞を受賞。一九八五年にはローベルが文を、アニタが絵を担当した「The Rose in My Garden」が出版された。日本では「どろんここぶた」や「とうさんおはなしして」など数多くの絵本が翻訳されている。

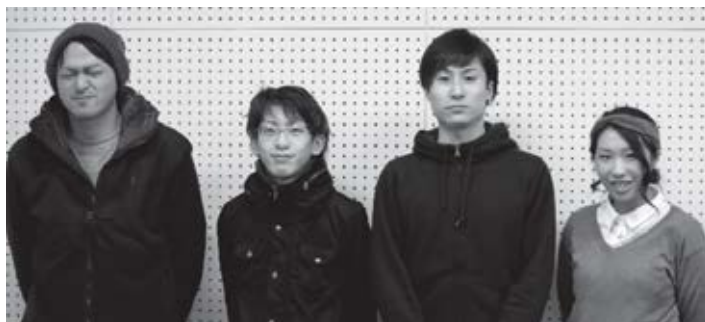
訳者の三木卓（本名、富田三樹）は、一九三五年東京に生まれるが、満州日日新聞等の新聞記者だった父に連れられて二歳から小学二年生までの六年間は大連で過ごした。かつて児童文学の編集者をしていた父に与えられた少年少女文学集など多くの本に影響を受ける。敗戦し

帰国する途中で父を亡くし、帰国後は母子家庭による貧困や小児麻痺などに苦しめられる。河出書房に就職し、詩を書きはじめ、同時にロシア文学の翻訳もするようになる。その後は小説も書きはじめ作家として大成する。

「ふたりはいつしょ」にはがまくんとかえるくんを主人公にした「はるがきた」「おはなし」「なくしたぼたん」「おてがみ」「すいせい」の五編の友情物語が収録されており、本作品はその一つである。「お手紙」は現在三社（光村、日書、大書）の教科書で小学二年生の読書教材として採用されている。「ふたりはいつしょ」に収録されている五つの物語の中でも「お手紙」はコールドコット賞を受賞し、全米図書賞児童文学部門でも最終候補に残った実力をもつ。

### 二 叙述について

「きみ、かなしそうだね」



本文の記述にはがまがえるくんの表情について一切触れられないが、やって来たかえるくんが開口一番に「かなしそうだね」と言ったことから、がまがえるくんは傍目から分かるくらいにとっても悲しそうな顔をしていたと読み取れる。

「そうになると、いつもぼく、とても ふしあわせな 気もちになるんだよ。」

「いつも」とあるので、がまがえるくんは自分が不幸せな気持ちになるとわかっていながらもお手紙を毎日待ち続けていることがわかる。ここからは、いつかはお手紙が来るのではないかがまがえるくんの期待が読み取れる。

「そりゃ、どういうわけ。」

本文を通して丁寧な言葉を使うかえるくんだが、ここでは少しくだけた言葉を使っている。ここから、かえるくんの好奇心、また、「お手紙を待つ時間が悲しいなんてどういうことだろう」という、がまがえるくんに対して感じる意外な気持ちを読み取ることができる。

「お手紙を まっているときに かなしいのはそのためなのさ。」

「そのため」とは、がまがえるくんはお手紙をもらったことがなく、毎日郵便受けに手紙が来ない事を指す。文末にある終助詞「さ」はそっけなさ、また投げやりさを表す助詞であり、ここから、お手紙が来ない事に関して投げやりになっている気持ちが読み取れる。

二人とも かなしい 気分で、 げんかんの まえに こしを 下ろし

て いました。

「ふたりとも」とは、がまがえるくんとかえるくんのことである。この時、がまがえるくんは、待てど暮らせどお手紙が来ないことから、そっけかえるくんは、そんながまがえるくんの悲しい気持ちを知らなかったことから、悲しい気分になっているのだと読み取れる。またがまがえるくんだけでなくかえるくんも腰を下ろしているのは、かえるくんもがまがえるくんに手紙が届くのを待っているからだと分かる。

かえるくんは、大いそぎで 家へ かえりました。

「大いそぎで」の部分から、かえるくんの「早く家に帰らなくては」という使命感、また、逸る気持ちが読み取れる。

えんぴつと紙を見つめました。紙に何か書きました。紙をふうとうに入れてました。

この三つの文章でかえるくんが踏んでいる工程は、「手紙を書く」ためのものである。つまり、かえるくんは手紙を書くために、急いで家に帰って来たのだと分かる。

「がまがえるくんへ」

かえるくんが封筒にこう書いたことから、手紙はがまがえる君宛てである事がわかる。

「おねがいでけど、この お手紙を がまくんの 家へ もって いて、ゆうびんうけに 入れて きて くれなにかい。」

「おねがいでけど」は、がまくんが一度もお手紙をもらったことが

なく、それを待つて悲しんでいるという状況を自分がどうにかしてあげたいという強い気持ちから、でている言葉なのではないかと推測される。「届けてくれないかい」ではなく、「ゆうびんうけに入れてきてくれないかい」と言っていることから、よりお手紙が届いたという状況を演出するために、「ゆうびんうけに」という細かな指示までしているのではないかと考えられる。

「きみ、おきてき、お手紙が 来るのを、もう ちょっとまって みたら いいと おもうな。」

「おきてき」と、「き」を使っていることで、お手紙を待つということの提案を促している。「もう ちょっと」から、自分が手紙を出したので、くるとわかつている自信の表れととらえることもできるのではないだろうか。

「ぼく、もう まって いるの、 あきあきしたよ。」

飽きたではなく「あきあきして」と言っていることから、お手紙を待つても待つてもこないという状況の繰り返しに、すっかり嫌になっっているさま、うんざりしているさまがみてとれる。「もう」や「したよ」などから、大きな落胆があるように読み取ることができる。

「そんな こと、 あるものかい。」

「そんな」という言葉は、現実味のないこと、否定的なことを指すときに使われる言葉。ここでは、かえるくんからの「ひよっとして、だれかが、きみに お手紙を くれるかも しれないだろう。」ということが、ありえないことだと考えているから、この言葉を使ってい

る。「あるものか。」ではなく、「あるものかい」と「かい」を使っているのは、これも同じで現実味のないことを強く否定しているものと読み取ることができる。

かえるくんは、まどから のぞきました。

「のぞく」という表現には、「物陰やすきま、小さな穴などから見る」「ひそかに様子をうかがう」という意味があるが、本文では「窓から」と表記されているために前者の意味としてとらえることができる。かえるくんは、かたつむりくんから手紙が届かないか、窓から様子をうかがっている。

「ばからしい こと 言うなよ。」

「ばか」という今まで使っていなかった少し強めの言葉を使っていることから、それほど手紙がくるということが、がまくんにとっては現実味がないことであるということ。「言うなよ」という言葉で強い否定を表している。

「今まで、だれも お手紙 くれなかつたんだぜ。今日だって、おなじ だろうよ。」

「今まで、だれも」から、手紙がこないという自分の状況に大きな落胆を感じていることがみてとれる。「今日だって」のは、昨日だってその前だつてと振り返って落胆しているということが読み取れる。「おなじだろうよ。」という言葉から、お手紙を待つという状況に投げやりになっているということが推測される。

「でも、来やしないよ。」

「でも」は前の文(「だって、今、ぼく、お手紙をまっけているんだもの。」)に対する否定を表現しており、かえるくんがお手紙を待っていない、手紙が来るはずがない、誰も僕にお手紙なんか出してくれないと、考えるがまくんの寂しい気持ちが含まれていることが伺える。

「きつと 来るよ。」

がまくんの「でも」という否定の表現に対して「きつと」という語句を使って、かえるくんは手紙が来ることを肯定している。「きつと」は確実に行われることを期待するさま。確実に行われることとは、自分の書いた手紙が、かたつむりくんを介して、がまくんのもとへ届けられることを示す。かえるくんは、お手紙が絶対に来ることを確信しており、落胆しているがまくんを勇気づけるために発言したものだと思われる。

「だって、ぼくが、きみに お手紙 出したんだもの。」

文頭の「だって」と文末の「もの」は、呼応する場合が多い。「きつと、来るよ」という言葉に対する理由(＝手紙が来る理由)をがまくんに説明している。これ以上、がまくんが落ち込んでいる姿は見えないため、手紙を出したことを自白したのではないかと推測できる。本当は、かたつむりくんが届けてくれるのを待ちたかったが、届く前に手紙を出した事を打ち明けたことから、かえるくんの優しさが感じられる。

「きみが。」

かえるくんが僕に手紙を書いてくれたことに驚いている。

「ぼくは、こう 書いたんだ。『親愛なる がまがえるくん。 ぼくは、きみが ぼくの 親友で あることを うれしく おもって います。きみの親友、かえる。』」

かえるくんは、この手紙で、がまくんは大切な友達であるということとを、強い気持ちで伝えている。それは、手紙の中に書かれている「親愛」、「親友」という言葉から読み取れる。

「ああ。」

「ああ」という感情表現は、色々な意味の喜怒哀楽の表現に多様に使われている。文章中の「ああ」は、かえるくんの優しさに、感動していることを表現している。

「とてもいいお手紙だ」

僕(がまくん)の事を親友と思っていてくれて、かえるくんに対するがまくんの感謝の気持ちと喜びが、この一言に込められていると考えられる。

二人とも、とても しいあわせな 気もちで、 そこに すわって いました。

がまくんは、親友と思われることを、手紙を通して知った。この一文は、喜んでくれたがまくんと同じ気持ちを共有しているかえるくんが共に玄関で手紙が届くのを待っている場面を表している。「かなしい気分で、こしをおろしていた」場面とは、真逆の気持ちで手紙を

待っていることが分かる。

お手紙を もらって、がまくんは とても ようびました。

がまくんは当初は、お手紙を受け取ることを目的としていた。しかし、途中でかえるくんががまくん宛に、お手紙を送った事と、そのお手紙の内容（がまくんを親友だと思ふ）から、がまくんはかえるくんの優しい気持ちを知った。単なるお手紙では無く、がまくんのことを思う、かえるくんの優しい気持ちがいっぱい詰まっているお手紙を受け取る事ができたから、「とても」喜んでいい詰まっているお手紙を受け取る。また、はじめての手紙がかえるくんからであったことも、喜びも感じた理由の一つである。

### 三 考察

#### (一) 物語全体を通して

この物語を読むと、大きな疑問が残る。それは、「かえるくんはなぜがまくんに手紙の内容を教えてしまったのか。」「手紙の内容を知った二人が、なぜ幸せな気持ちで手紙を待っているのか。」ということである。

前半に関しては、がまくんが手紙なんて来ないというので、かえるくんが待ちきれずに教えたと一応説明をつけることができる。しかし、後半の問いは難しい問いである。かえるくんは、悲しそうでないがまくんと一緒にいることがしあわせなのである。一方、がまくんは前述の「ああ。」の解釈によって異なってくる。つまり、「ああ。」が、「きみの親友、かえる。」を受けていると考えれば、しあわせな気持ちにさ

せているのは、手紙を待つことと、かえるくんと一緒にいることの方となる。しかし、「ああ。」を「とてもいいお手紙だ。」のつながりだと考えれば、手紙を待つこととなる。

また、かえるくんはがまくんに、「お手紙に何て書いたの。」と聞かれこう答えている。

「ぼくは、こう書いたんだ。『親愛なるがばがえるくん。ぼくは、きみがぼくの親友であることをうれしくおもっています。きみの親友、かえる。』」

内容が明らかにされた手紙を待つことの意味は、まさにがまくんとかえるくんの時間を共有するということにあるのではないか。そのために、かたつむりくんが配達人として必要とされたのである。かたつむりくんが予想外に手紙を配達するのに時間がかかったことが、結果として、がまくんとかえるくんが（来ると分かっているのに）しあわせな気持ちでお手紙を待つ時間となったのである。

次に、冒頭の玄関の場面と末尾の玄関の場面に注目して考えていこうと思う。手紙を待っている、がまくんと、かえるくんの様子が冒頭と末尾では「かなしい気分だ」が「とてもしあわせな気持ちで」に、「こしを下ろしていました」が「すわっていました」に変化している。「こしを下ろして」よりも「座って」という方が安定性があるように思う。

また、挿絵を見ると、次のような違いがある。冒頭の二人は悲しそうな表情であり、それぞれの膝のところで自分の両手を組んでおり、がまくんは左足を右足に重ねて、指は力なく伸びている。一方、末尾の二人は互いに肩を組み、楽しそうな表情であり足は上に向いていて躍動的である。

この変化は、手紙の内容を知った二人が、なおしあわせな気持ちで

手紙を待っているということによってもたらされるものではないだろうか。

## (二) かたつむりくんの存在について

この物語は、誰からも手紙をもらえずにいる「がまくん」をかわいそうに思った「かえるくん」が、がまくんあてに手紙を出してあげるという友情の物語である。メインの登場人物もがまくんとかえるくんの二人であり、そのふたりの会話を中心に物語も構成されているが、ここでは第三の登場人物である「かたつむりくん」についての考察を述べる。

まず、かたつむりくんが物語中で発したセリフは、「まかせてくれよ。」と「すぐやるぜ。」の二言だけである。この二言は、かえるくんからがまくんあての手紙を届けてくれないかと頼まれたことへの返事である。このときかえるくんは、かたつむりくんに手紙をあげようと思っていたわけでは無く、書いた手紙をもって家を飛び出したところ、かたつむりくんに出会ったため、手紙を届けてくれないかと頼んでいる。かたつむりくんからすれば、ぼったり会ったかえるくんにも急に手紙を届けてくれないかと頼まれたわけだが、突然の頼みにも関わらず、何の躊躇もなく許諾していることから非常に気前の良い性格であると考えられる。「すぐやるぜ。」のように、「くだぜ」という口調からも、頼まれたことに対してのやる気のようなものを感じ取れる。

かたつむりくんに手紙を託してから、かえるくんはがまくんの家へと戻る。そして寝ているがまくんをわざわざ起こし、もうすこし手紙が届くのを待っているように促すも、なかなかかたつむりくんが手紙を持って来ないために、窓の外を気にする描写がある。がまくんと会

話をしながら二回も窓の外を確認していることから、かえるくんは、まだかまだかたつむりくんの到着を待ち望んでいると考えられる。おそらくかえるくんのプランとしては、もうすこし手紙が来るのを待つてみようとかまくんに促しているうちにかたつむりくんが手紙を持って登場し、がまくんが歓喜するようになっていたのではないだろうか。そう考えれば、そのつもりでがまくんと会話をしていたものの、手紙は来ないと決めつけてしまっているがまくんがやつぱりかわいそうに思えて、かたつむりくんの到着を待つことなく、自らが手紙を書いたことをがまくんに伝えたと考えることができ。ここでポイントとなるのは、かたつむりくんの予想外の到着の遅さである。かたつむりくんがかえるくんの思惑通りの時間に到着していれば、かえるくんが自身で手紙を書いたことを報告しなくてもよかったことになり、がまくんとかえるくんの会話の最中に手紙をもったかたつむりくんが到着し、てがみをもたらしたがまくんが喜んでハッピーエンドという形で物語が終わってしまう。結果的にかたつむりくんは四日後に到着したのだが、その四日間ずっとがまくんとかえるくんは手紙を幸せな気持ちで待ち続けている。がまくんは、初めて自分に手紙が届くことへの、かえるくんは、自分が書いた手紙でがまくんが喜ぶことへの高揚感をそれぞれ抱いていたからである。このかたつむりくんを二人で四日間も待つ場面が最も印象的な場面であり、ラストシーンでもあるのだが、この場面を生み出したのはまぎれもなくかたつむりくんなのである。かたつむりという生き物は非常に動きが遅いことと、手紙を届けることを快く許諾していたことから、かたつむりくんは決して悪気があつて四日もかけたのではなく、一生懸命がまくんの家を目指した結果、四日間かかったと考えられる。

本来は出した手紙が遅く届くということが良いことではないのだが、この物語の中ではそれが展開を良い方向にはこんでいる。よって、その原因であるといえる「かたつむりくん」はセリフこそ少ないものの、この物語をおもしろくしている大きな存在であるといえるだろう。

